

マーク・トウェインのユーモア

——「跳び蛙」——

金谷良夫

「やあ、…ほかの蛙よりどこがいいのかわかんねえよなあ」

マーク・トウェインは一八三五年ミズーリ州の寒村フロリダで生まれ、⁽¹⁾4才でハンニバルに移り住み、一二歳で父親と死別して以来、印刷工として遠くはニューヨークをはじめ各地を放浪して回り、そしてハンニバル、セント・ルイスやキオカックにおいて植字工を経験した。その後一八六一年までミシシッピ川の蒸気船のパイロット見習いおよびパイロットをつとめた。南北戦争が始まると一時参戦し、その後極西部へ行き、そこで一攫千金を夢見て金鉱探しを試みたが成功をおさめることはできず、ネヴァダ準州それからサンフランシスコにおいて新聞記者に従事したのである。

マーク・トウェインの作品を見ると、彼は一八五二年五月一六歳の時、ボストンの『カーペットバッグ』という文芸雑誌に「伊達男開拓居住者をおどかす」と題

したユーモラスな習作を残しており、これが彼の最初の作品と見做されている。しかし、彼が金字塔を建てるには一八六五年一月一八日まで待たねばならなかった。この時トウェインはニューヨークの『サタデープレス紙』に「ジム・スマイリーと跳び蛙」を発表したのである。

この作品は「キャラベラス郡の名高き跳び蛙」として短編集の中でも取り上げられている。トウェインが「跳び蛙」(以下こう略記)を書いたのは、彼が一八六四年一月四日から一八六五年二月二五日までカリフォルニアのキャラベラス郡を旅し、そこでジム・ギリスとジャック・アス・ヒルおよびエンジェルズキャンプ付近に滞在し、そこで何度となく聞いた話を基にしたと言われている。跳び蛙の話はもともと黒人の民間伝承や古代アテネの寓話に由来すると言われているが、エンジェルズの金鉱キャンプでさかんに語られていたものはむしろアメリカのほら話の系譜に属するものである。

「跳び蛙」は発表と同時に「マーク・トウェイン」の

名を全米ばかりか世界にまで轟かせた。トウエインは正に二九歳の若さで一世を風靡したのだった。トウエインの権威者バナード・デヴォートは「そのジャンルの中で、この短編は熟成された傑作だ⁽⁴⁾」と述べている。トウエイン自身は、この作品を「一つの極悪な未開森林地の小品⁽⁵⁾」と手紙で書いているが、東部出身の文学者ジェームズ・ラッセル・ローウェルはこの作品を「アメリカにおいてこれまで生み出されたユーモア文学で最もすばらしいもの⁽⁶⁾」であると賞賛している。確かにアメリカには数多くのユーモア作家が存在していたが、現在においてもその名を留めているのはマーク・トウエインを置いて他に考えにくく、況やユーモアを文学作品にまで高めた作家はおらず、彼の獨創性は他に追隨を許さない。

さて、「跳び蛙」が何故高く評価された短編なのか（今なお評価される）のかを詳しく見てみよう。まず第一に、この作品に流れるユーモアがある。因に、この作品の確立によってアメリカでは今もって作品に登場する跳び蛙を由来とする跳び蛙のコンテストが毎年ユーモラスに繰り広げられている。

それではトウエインのユーモアとは何であろうか。ユーモアとして考えられるものに、まず物語の枠組がある。東部の友人からの依頼で語り手の「私」は、存在し得ないような福音派の若い牧師であるレオニダス・W・スマ

イリーについて調べようとするが、結局その件は物語の中の語り手サイモン・ウィーラーによってさて置かれ、本筋を外されてしまい、それについては一際聞けず仕舞である。読者は短編を全部読み終え、結局最初の依頼の件は「一体何だったのか」と作者トウエインの巧まざるユーモアによって一杯喰わされた形になる。つまり、後に笑いが残るだけである。ところで、アメリカの読者はこうしたストーリーに騙されることを好む（日本人は好まない）のである。

次に、ペルソナとして考えられる物語の中の語り手サイモン・ウィーラーにトウエインの意図するユーモアが明確に読み取れる。サイモン・ウィーラー爺さんは、エソングェルズキャンプという崩れかけた金鉱の荒れた居酒屋のバーのストウのそばで、心地よさそうにまどろんでいるのを「私」は見つけ、彼からその牧師のことを聞き出そうとするが、ウィーラー爺さんに巧みにバーの隅に追いやられ封じ込められてしまう。ウィーラーはでっぷり太り、禿げ頭をし、その落ち着いた顔つきは愛嬌たっぷりでは飾らない様子である。「彼は決して微笑みも見せないし、決して眉をひそめないし、はじめの言葉の調子も崩さず、一際熱情といったものも示さないが、そのとめどない語りの中にはずっと一脈の真剣さと誠実さが印象的に流れていた。彼は自分の話に馬鹿げたところやお

かしなところがあるなどとは夢にも思っておらず、それを本当に重大なことだと考えており、話に出てくる二人の主人公たちは卓抜な天才の持主だと尊敬していることをはつきりと示していた。彼には思いのまま続けさせることにして、一度も話をさえぎらなかつた。」ウィーラーの態度や「単調な語り口に呆気に取られてしまい、いつの間にか最後まで乗せられ聞かざるを得なくなってしまう。読者自身彼の笑いを誘^{いそ}う。ウィーラーのこの何気ない無表情（ポーカークフェース）な語り口は正にトウエインの語り口と相通じ、トウエインが一八九五年に書いたエッセイ「物語の話し方」⁽¹⁾の中で述べた基本的な見方と一致している。「物語の話し方」でトウエインは「ユーモラスな物語はアメリカ」のものだと述べ、次のように続けている。「ユーモアものは、喜ばれれば脱線することもあろうし、とりわけ一定の場所へ辿り着くこともないだろう：ユーモアものは優しく快活に話し進み、聞いている方は吹き出す。……ユーモアものは完全に芸術作品であり——立派で優美な芸術——であり芸術家だけが語ることができ、……ユーモアものを語る術は：口で語られ、活字にされるのではなく、かつアメリカで創造されたのだ……：ユーモアものはまじめくさって話され、語り手はそれには何かおもしろ味があるのではないかと漠然と想像することすら精

一杯隠そうと最善を尽くすこと、……：ユーモアものは芸術であり、しかも立派で美しく名人だけが語ることができる。……均り合わないところや理に適わないところをとりとめもなく、時には、無意味な形で一緒に結び合わせることに、そしてそういうところは不合理なことだとは無邪気にも気づく気配もないことがアメリカの芸術の基礎なのだ。……もう一つの特徴の落ちはさりと軽く片付けること。三つ目は、考え事を口に出すかのように思わず知らず考え出した言葉をそれとなく言うことである。第四番目の最後は、間だ」というように、トウエインは物語の語りの重要性を説く。こうした資質を備えたウィーラー爺さんは実に見事に「私」を彼の世界へと誘っている。パスカル・コヴィチ二世の言葉によれば、サイモン・ウィーラーはトランプゲームをポーカークフェースでプレイし、自分の持ち札ツツペアで賭ける時、それがあたかもフルハウスであるかのように思わせ、相手の持ち札がストレートフラッシュでも完敗の手のように思わせるような手法を用いている⁽²⁾と述べている。読者も「私」と同様彼の巧みな語り方に正に知らず知らずのうちに彼のペースに乗せられてしまうのである。

トウエインは元来口頭で語られていた物語の伝統を文学の領域にまで導き、その伝統を築いたと言うことができる。たとえば、トウエインの作品に登場するハック・

フィンはその代表的語り手である。ウィーラーのような卓抜した語り口がユーモアを生むが、この語り口に必然的にかかわってくるのがヴァナキュラー、すわなちお国言葉もしくは方言によるユーモアの醸成であり、これが第三にあげられる。『ハック・フィンの冒険』の中では、ハック・フィンが方言を用いてその物語のユーモアや笑いを醸し出すが、「跳び蛙」においては、ウィーラー、⁽⁹⁾ ジム・スマイリー、見知らぬよそ者がそうした言葉を駆使し物語全体にユーモラスな調子を織り込んでいる。この南西部（見知らぬよそ者を除く）の方言には、その生命力溢れる素朴さが感じ取れるが、仮にこうした表現が東部の味けない言葉で語られたとすれば、そこにはそれだけのおかしさやニュアンスが伝わったかどうか疑わしい。ジム・スマイリーという賭け好きの若者は相手を見つけては賭に余念がない。一時、ウォーカー牧師の妻の病気に賭け、その際言う、‘Well, I’ll risk two-and-a-half she don’t anyway.’「ああ、彼女が直らねえ方に二ドル半賭けよ」と、あるいはそのよそ者に対して自分の蛙について言う。‘It might be a parrot, or it might be a canary, maybe, buy it ain’t — it’s only just a frog.’「オウム、それともカナリヤってこともあるかね。でもただの蛙ってわけさ」あるいは（おそらく西部の方言を念頭に置いて）そのよそ者が賭

けで最初に言う、‘Well, … I don’t see no pints ab out that frog that’s any better’n any other frog.’「やあ、…ほかの蛙よりどこがいいのかわかんねえよなあ」と言い、結局スマイリーはこのよそ者に賭で敗れてしまうが、その際再びそのよそ者は皮肉たつぷりと、とぼけて同じ字句を繰り返すところは実にユニークで面白い。ケニス・リンはこの文を「アメリカのユーモアの歴史において最も有名な言葉の一文」と述べ、その文のユーモア溢れる点を指摘している。

第四に、ユーモアを作り出す要素として物語のキャラクターおよび内容が考えられる。ウィーラーの一図さ、他のものへの無関心さ、ポーカーフェースの面持、さらに「優しさ」と素朴さ」によって読者は彼の面白味のないところに逆にユーモアを見い出すことができる。そして、重要なキャラクター、天真爛漫なジム・スマイリーがいる。スマイリーの面白さは、彼の無邪気さ、まぬけさ、そして何をも気にしない一図さあるいは単純さにある。スマイリーはとにかく、もし相手になる人が見つければどんなものにも賭けるといふ非常に好奇心旺盛な男であり、相手側が賭ける側を変えたいと考れば喜んでそれさえいとわなしいし、相手側が気に入ればどんな方法だって気にはしない、というような最も「危険」な奴である。しかし人は滅法いい。お人よしと言った方がよい。先に

述べたようにスマイリーは、ウォーカー牧師の妻の病が治る方に賭ける者がいれば、治らない方に賭けるといふ始末である。これは不敬をあらわすブラックユーモアの類たぐいに属するだろう。

他のユーモラスなキャラクターとして見知らぬよそ者が考えられる。この人物をある批評家は南西部ユーモアの系列に入る詐欺師で、『ハック・フィン』の冒険」に登場する「王様」と「公爵」の「完璧な例」と捉えている。¹⁰ このキャラクターは、スマイリーの愚さを見透し、足元を見て巧みに騙し、賭けに勝つ。確かにこのキャラクターは悪玉ではあるが、ユーモラスな存在であることは否めない。他に忘れてならないキャラクターとして、スマイリーの所有するコミカルな動物のキャラクター、「一五分の競争馬」および擬人化されたブルドッグの子犬アンドリュウ・ジャクソンと蛙のダヌル・ウェプスターがいる。これらのキャラクターを順を追って説明すると、まず「一五分の競争馬」は馬場を一周するのに一五分もかかる少年たちからかわれる牝馬で、しかも喘息持ちで「絶望的のようであるが、土壇場で、「クビ」の差で勝つという代物だ。次に、重要なキャラクター、アンドリュウ・ジャクソンは「小さなかわいらしいブルドッグの子犬」で、「頑迷に見え何かを盗み取ろうとチャンスをねらう」闘犬である。しかし、アンドリュウ・ジャ

クソンは金が賭けられる段になると性格が変わり「蒸気船の船首楼のように下顎が突き出、歯は蒸気船のむき出しの炉のように光り……金が全部賭けられると相手の後脚にまるで一年でも」噛み付いて離さず、賭けに勝つという逸材の持主である。彼の得意技はこの後脚の関節への噛み付きだが、ある時、対戦相手に騙され後脚を丸のこで切断された犬と闘う破目に陥り敗北してしまう。その時のアンドリュウ・ジャクソンの表情は実にユーモラスに描かれている。「アンドリュウ・ジャクソンは心は打ちひしがれたといわんばかりにスマイリーを見た。自分のせいです。闘いに自分の抛り所でもって捉えようとするのに後脚のない犬を立てられたのです。そしてそれからびっこを一步引いて倒れ死んでしまった。」語り手ウィラーは、「いい子だった、アンドリュウ・ジャクソンは、それにも生きていけば独力で名をあげただろうに。素質もあるし、天才もあるのだから。」と加えている。アンドリュウ・ジャクソンとは、現在の南部出身のアメリカ第七代大統領になった人物である。現在の人物と言えばなおおもしろさが増すと言えよう。そして、さらなる重要なキャラクターにダヌル・ウェプスターがいる。ダニエル・ウェプスターも東部出身の現在の政治家で、実際に蛙に似ていたという。ダヌル・ウェプスターは天賦の才能にたけてはいたが、訓練には訓練を重ねて

生き残るためには「ユーモアは公然と説教したり公然と数えたりしなくてはならない」と書いている。「跳び蛙」において、確かにそうした説教や教えずなわち教訓（モラル）を見出すことができよう。トウエイン自身、どちらが勝利をおさめたかについては書いてはいないが、東部対西部、（表面的に）洗練されたもの対素野なもの、道具として使われる動物対人間、あるいは人間の欺瞞対人間の純粹さなどにそうしたモラルを読み取ることが出来る。

ともあれ「跳び蛙」に見られるユーモアには悲哀が見い出させるのは何故か。「一五分の競争馬」は賭けのレースに勝つには勝つがその姿は実に悲愴感さえ伴うし、ブルドッグの子犬アンドリュー・ジャクソンが最終的に賭けに負けて最期を遂げる時も然りである。あるいは蛙ダヌル・ウェブスターが最後に自分の体が重すぎて跳べない時にもそうした悲哀が漂う。マーク・トウエインは一八九七年の『赤道に沿って』の中で、「人間的なものすべてがペーソスに満ちている。ユーモア自体の秘密の根源も喜びではなく、悲しみである。天国にはユーモアはない。」と述べている。

マーク・トウエインの作品には独創的なユーモアとペーソスが読み取れる。彼はリアリズムに徹しながら、僅かな誇張やデフォルメを施して笑いを誘発するテクニク

すなわちユーモアを見事に描出しているのである。

マーク・トウエインは、自分のユーモアは「三〇年」は生き長らえると『自伝』で述べているが、にもかかわらずトウエインのユーモアは現代においても生き続けているということが出来る。果たしてトウエイン自身にはそれが想像できたことだろうか。カリフォルニアへ金鉱探しに行ったマーク・トウエインは金鉱を探すことには成功しなかったが、その代わり「跳び蛙」という見事なストーリーの発掘に成功し、「跳び蛙」をしてマーク・トウエインという名を世に知らしめたのである。

【注記】

(1) 『マーク・トウエインの自伝』の中で、トウエインは自分が生まれたことよって村の人口を一パーセント増やしたとユーモラスに述べている。Mark Twain, *The Autobiography of Mark Twain*, ed. Charles Neider (New York: Harper & Row, Publishers, 1957) p. 1.

(2) David E. E. Sloane, *Mark Twain's Humor: Critical Essays* (New York: Garland Publishing, Inc., 1993) p. 4.

Edgar M. Branch, James D. Wilson, *A Reader's Guide to the Short Stories of Mark Twain*, (Boston:

G. K. Hall & Co, 1987) pp.165-6.

㉔ Elizabeth McMahan, *Critical Approaches to Mark Twain's Short Stories* (New York : National University Publications, Kennikat Press, 1981) p.12.

㉕ Bernard De Voto, *Mark Twain's America* (Westport: Greenwood Press, 1960) p.177.

㉖ *Mark Twain's Letters I*, ed, Albert BegeLOW Paine(New York : Harper & Brothers, Publishers, 1916) p.101.

㉗ Kenneth S. Lynn, *Mark Twain and South Western Humor* (Westport : Greenwood Press, 1959) p.147.

㉘ Mark Twain, *The Complete Essays of Mark Twain*, ed. Charles Neider (New York : Doubleday & Company, 1963) pp.155-58.

㉙ Pascal Covici, Jr., *Mark Twain's Humor : The Image of a World* (Dallas : Southern Methodist University Press, 1962) p.49.

㉚ Henry Nash Smith, *Mark Twain : The Development of a Writer* (New York : Atheneum, 1970) p.11.

マーク・トウェインが「跳び蛙」をして国民的評価を得られたのはサイモン・ウィーラーというヴィナキュラーの代表的存在の神秘的な魅力にもよると述べられている。

㉛ Kenneth S. Lynn, p.147.

㉜ Frank Baldanza, *Mark Twain : An Introduction and Interpretation* (New York : Barnes & Nobel,1961) p.115.

㉝ Sydney J. Krause, " The Art and Satire of Twain's ' Jumping Frog Story, " *Critical Approaches to Mark Twain's Short Stories*, p.23.

㉞ Mark Twain, *The Autobiography of Mark Twain*, p.298.

㉟ Mark Twain, *Following the Equator, The Writing of Mark Twain Vol.5,6.* (New York : Harper & Brothers, Publishers, 1904) II, p.119.